

良忍と融通念仏

戸田孝重

一 はじめに

良忍（一〇七三—一一三二）の提唱した融通念仏は、今日もなお、全国に分布し、大念仏・六斎念仏などの民俗行事として残されている。その中で、融通念仏信仰をうけついで宗派として融通念仏宗がある。融通念仏宗は全国各地に伝えられていた融通念仏の中で、大念仏寺（大阪市平野区平野上町）を本寺として形成したもので、大阪府・奈良県を中心に末寺を有する関西のみに教線をもつ一教団である。

良忍の入滅直後に書かれた伝記類のうち『三外往生記』には、彼の夢の告として「融通念仏」の言葉が語られていることをもって、良忍と融通念仏が結びつけられ、融通念仏は平安末期に良忍が創唱したとされてきた。しかしながら、このことは疑問視されていないわけでもない。¹⁾そこで、良忍の融通念仏創唱について検討してみたい。

良忍の研究を進めるにあたっては、まず、その資料価値を明らかにしておかねばならない。一般史学の事例をもつてすれば、一々の資料をその価値に応じて、根本資料、第一次資料、第二次資料、第三次資料などに区別しているが、

良忍の研究に際しても、その根本資料は何か、第一次資料は何かなどと資料吟味をしておくことが必要である。

さて良忍の研究において最も資料価値の高い根本資料は何かといえ、その自著、文書筆蹟など自らの手による資料である。従来は良忍には一部の著作もないものと考えられてきたが、近年の調査研究によって、少なくとも良忍には『布薩略作法』と『出家作法』とがあることがわかってきている。⁽²⁾このほかに『三観義私記抄』も自著とみるべきかもしれないとされているが、今後の調査に委ねなければならぬ。次には大原如来藏にある良忍関係の資料である。筆写本十二点と、手摺本三点と合せて十五点が存在することが確認されている。特に如来藏には彼が十八歳、二十歳、二十一歳頃の書写本九点があつて、青年時代の良忍がどのような勉強ぶりであつたかを示す貴重な根本資料である。また先年紀州粉河寺の経塚から発掘された法華經の願文がある。良忍の筆蹟ではないが觀進僧の一面を示す在世中の資料として根本資料に加えるべきものである。

つぎに良忍研究の第一次資料は『後拾遺往生伝』と『三外往生記』にある良忍伝である。片々たる小伝にすぎないが、彼の入寂直後に書かれたもので、良忍の素描をうかがう上で極めて貴重な資料である。特に『後拾遺往生伝』の著者三善為康は保延五年(一一四〇)に九十一歳でなくなつていたので、為康が、「沙門良仁」伝を書いたのは、良忍の入寂(一一三二)以後、数年を出なかつたと思われる。⁽³⁾また『三外往生記』の成立年代は、最も新しい良範伝からみて保延五年(一一四〇)以後間近い頃とみられるが、保延五年は良忍示寂の天承二年から僅か八年であり、また、もし著者蓮禪の生存年代を示す下限である久安年間の最後の年をとつても、二十年とは隔たないと考えられている。⁽⁴⁾『後拾遺往生伝』よりわずかに下る作品である。したがつて、この両書に見られる良忍伝はともに良忍滅後数年もしくは十数年を出でざる間に記されたもので、良忍研究の第一次資料として甲乙のつけ難い貴重な文献である。

ところが『後拾遺往生伝』には「沙門良仁」伝はあっても「良忍上人」伝はないと思ひ誤って『後拾遺往生伝』中巻にこれを補ったものが「上人良忍」伝である。この補遺がいつなされたのかは明らかではないが、その組織構成を前記の二伝と比較してみると、その間には進展のあとが見られる。したがって、一応は第一次資料中に収めて置くが、別個の取扱いをしたい。

つぎに良忍研究の第二次資料としてあげるべきものは、鎌倉中期になって橘成季の書いた『古今著聞集』（一二五四）である。前記三種の伝記成立以後百年の間に、良忍を敬慕崇拜する念仏衆団がどのような発達をとげ来たったかをうかがう何等の記録も残されていないが、この『古今著聞集』に見るかぎりにおいて、鎌倉中期になると相当大きな念仏衆団が形成されていたらしく、そこには融通念仏の創唱者としての良忍像が信徒間に出来上がっており、『古今著聞集』の作者は、この良忍像を浮かびあがらせたものと見られる。

第三次資料としては『融通念仏縁起』と『元亨經書』巻第十一の「釈良忍」伝がある。『融通念仏縁起』の成立は鎌倉末期の正和三年（一一三二）とされ、師鍊の『元亨經書』は元亨二年（一一三二）とあるから、ほとんど同時代の著作であるが、『融通念仏縁起』の成立によって、融通念仏宗祖としての良忍像は確立されたと言ってもよい。なお第四次資料としては江戸時代になっての師蠻の『本朝高僧伝』巻第五十一にある「城州来迎院沙門良忍伝」がある。また大通融観の著わした『融通円門章』はもちろん史書ではないが、良忍の資料としては第四次資料と言ってよいだろう。

一 根本資料に見られる良忍

洛北の大原はかつて良忍が隠棲した場所である。この大原には良忍が建てた来迎院があり、また良忍関係の資料をおさめた「如来藏」なる経藏があるので有名である。『元亨釋書』卷第十一によると、

天仁二年來迎院成。忍_ニ於此地_一唱_ニ顯密_一。又闢_ニ聲明梵唄_一。天承二年二月一日亡。年六十一。忍建_ニ一字_一度_ニ大藏經律論_一。名曰_ニ如来藏_一。所_レ持彌陀經時時放_レ光。其徒_レ収_レ之置_ニ藏中_一。

とあり、来迎院の完成は天仁二年（一一〇九）であつたと言ひ、如来藏なる経藏も良忍在世中の建立であつたといふ。大原の地は比叡山の横川と隣接しているので、昔から「叡山の別所」として密接な関係をもつており、特に叡山の浄土教が源信の後から横川を中心に発達してくると、この大原の念仏もまたその流れを汲むようになってきた。井上光貞氏は藤原前期から良忍のころまでの大原の歴史を三期に分けている。すなわち、第一期は藤原中期までで、浄土教の盛んになった時代である。この期には天台座主延昌（八七〇〜九六四）が天徳三年（九五九）に大原に接する静原に補陀落寺を開き、寂源が長和二年（一一〇一〜一三）に勝林院をおこして念仏生活を始めてゐる。第二期は藤原後期から白河院政期のはじめまでで、台密の谷流に属する長宴などが勝林院を本拠として活躍した時代である。大原の歴史の第三期を劃するのは良忍の大原入りで、来迎院には良忍の兄なる良賀の筆の『衣内宝珠集』『因明四相違指事』『注釈抄』などが現存し、また菓源の筆になる曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』や『略論安樂土義』などの浄土教文献があつて、これらは良忍の手撰本となつてゐる。いまこの如来藏にある現存資料で良忍の書写本や手撰本と認められてゐる

ものは十五点である。

まず、「法函」の中蓋表墨書に、

安楽土義 開山良人上人筆 老卷

實相觀門 同 同

讚阿弥陀佛偈 同 同

佛種集 同 同

金鍼論 同 老帖

来迎院 三觀義 同 老冊

雲宝古筆入目錄

玄義指導 同 三冊

止觀指導 同 貳冊

宝幢論 同 老冊

不題知奥書有之 同 三冊

衣内宝珠集 持乘房了賀
良人之舎兄 老冊

東塔東谷

注釋抄 同 貳冊

四相違指事 同 老冊

第一長老
本覺房縁忍

蕪悉地経疏 第一長老
本質房縁忍

八冊

傳教大師度牒戒牒

壹冊⁽⁷⁾

とあり、同じく中蓋裏墨書に、

今歳享保十六辛亥二月一日、元祖光静房良忍上人六百聖忌勸_レ修之、而追慕在世、雖歎_レ今陵夷、聲明雅音、融通之念術、殘_レ此寺_一聊又拜見_レ上人幼年之古筆発願文、信心銘肝、無_レ不_レ歎息、仰_レ尋本地_一、聖徳太子後身、如意輪觀世音菩薩之、應_レ作_レ本師阿弥陀佛之名号、音作_レ佛事_一道_レ勸進、不_レ能_レ無_レ其所以、後人願_レ其本紹隆之地_一とある。

善逝院咸開識之⁽⁸⁾

つぎに、良忍の書写本や手扱本として認められている現存資料をあげておく。

一、題名未詳 一帖 一〇六紙

〔奥書〕 寛治四年六月八日午時許書寫了 執筆僧良仁 生年十八歳

二、題名未詳 一帖 三十七紙

〔奥書〕 寛治六年正月十六日申時始二月二日巳時書寫了 執筆僧良仁 生年廿

三、題名未詳 一帖 一四八紙

〔奥書〕 寛治六年 自五月十日辰時始 九月二日巳時書寫了 執筆僧良仁生年二十

四、題名未詳 一帖 九十紙

〔奥書〕 寛治六年六月十四日檀那院実報房書寫了、執筆僧良仁、生年二十歳

これは四帖を合冊したもので、文中には「第二帖」「第三帖」「第四帖」と記し、各帖の初めに目次がつけられている。なお、巻首が大破しているが、この部分は「第一帖」の目次のようなものである。経疏の抄出と思われる。

五、題名未詳 一帖 一一八紙

〔奥書〕 ナシ

以上、一、二、三、五、四帖を一包として、包紙表書に「無外題書、四帖、良忍上人筆」とある。

六 題名未詳 一帖 三十二紙

〔奥書〕 ナシ

七、玄義指事第四 一冊 四十三紙

〔奥書〕 ナシ

八、摩訶止観第一 一冊 十六紙

〔奥書〕 ナシ

九、止観指事 一冊 四十四紙

〔奥書〕 ナシ

十、高建寶幢論問答第十一冊 三十六紙

〔奥書〕 □□□□^{〔破損〕}二月廿日午時書寫了同日未時一交了^{〔別筆〕}

十一、讚阿弥陀佛偈 一卷 四紙

〔奥書〕 康和元年十二月一日申時於大原報身房書寫功畢 同二日移點了、報筆僧藥源

十二、遊心安樂道 一卷 三十一紙

〔奥書〕 一校了

十三、仏種集上卷 一卷 二紙

〔奥書〕 康^(和之)五年八月十日未刻、於叡山檀那院実報房書寫功了、(朱同筆)「同刻移點了 比交了」 比丘良忍

十四、金剛鐺 一帖 三十紙

〔奥書〕 嘉承二年四月廿三日始之、五月一日寫之了、良忍(三十五歲)

十五、三觀義 一帖 一三四紙

〔奥書〕 保安二年二月廿九日寫^(追筆)了

* 右の文中()印は年齢が書かれていないため前の資料からの推定年齢⁽⁹⁾

このほかにも『用心学』と題した良忍の抄本らしいものも残されているようである。そして、一、「題名未詳」の内題として「第一玄義指事」、また、六、「題名未詳」の外題として「安樂土義 良忍之」、「康和二年二月四日未時書寫了、同月六日巳時許、於大原草庵移點了 桑門葉源」などの文字が確認されている。

今、これらの根本資料によって良忍の研究をすすめていくと、若干の史実が明らかとなる。その第一は良仁と良忍の問題である。如来蔵の資料を年齢別に整理すれば、

寛治四年 一〇九〇 良仁 十八歳

寛治六年 一〇九二 良仁 二十歳

康和五年 一一〇三 良忍 (三十一歳)

嘉承二年 一一〇七 良忍 (三十五歳)

となる。これによって、彼は十八歳ごろの青年時代は「良仁」と自署していたが、三十一歳以後は「良忍」と署名している。彼みずからそのように改めたのではないだろうか。第二には叡山における住坊の問題である。二十歳の時に書いた四、「題名未詳」の写本には「檀那院実報房書写」とあり、また三十一歳の時に書写した十三、「仏種集」上巻の奥書にも「檀那院実報房書写」とあるので、二十歳から三十一歳のころまでは山上の檀那院実報房にいたことがわかる。

次に述べるように良忍に関する三種の往生伝のうち『後拾遺往生伝』巻中には「上人良忍は台嶺首楞嚴院の禅徒なり」と言って横川の住侶としており、『三外往生記』には「良忍上人は延暦寺東塔常行堂の堂衆なり」とあって東塔と横川の両説が見られるが、如來藏資料によるかぎりは東塔檀那院に居たことになる。さらに第三には良忍の大原隱遁の時期である。『融通念仏縁起』には二十三歳隱遁説がとられ、これが通説になっているが、三種の良忍伝をみると、「中年以後大原に移住す」とあったり、「暮年に及んで大原に隱居す」とあったりしている。しかるに如來藏資料によるかぎり、康和五年にはまだ檀那院実報房で『仏種集』を書写しているのであるから、少なくとも三十一歳までは山上生活をつづけていたものと言わねばならない。第四には青壮年時代における学風である。寛治六、七年のころには『摩訶止観』や『法華玄義指事』などを写しており、天台文献の書写は湛然の『金鍼論』を三十五歳に、覚超の『三観義私記抄』を四十九歳に写している。また浄土教への関心であるが、現存資料によるかぎり、薬源が大原で康和初年(一一〇九〜一一一〇)に写した曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』と『略論安樂土義』や『遊心安樂道』を入手しているが、これらの手扱本によって良忍の浄土教の傾向を推測することは、あまりにも資料不足で困難である。ただ、

ここで注意をひかれるのは、葉源なる僧の存在である。彼は顯教系統の人であり、この人と良忍との関係はその伝記を考察する上で重要だと思われる。しかし、残念ながら今のところ私には詳しいことはわからない。また葉源は、最澄撰の『三平等義』、及び唐孟猷忠の撰にかかわり『日本靈異記』にも影響を与えた『金剛般若驗記』なども書写している。これは日光の天海蔵にあり葉源が天仁三年（一一一〇）に大原来迎院で書写している。良忍のころ来迎院と交渉をもっていた学僧の一人であったのであろう。

すなわち、ここでは良忍は良賀を師とし、葉源という人物と何らかの関係があったこと、そして、山上にあっては東塔に居たということに注意をしたい。

三 法華勸進僧としての良忍

良忍が法華勸進の行者であったことは、昭和三十四年九月、紀州粉河寺裏の産土神社の経塚で発見された経筒の銘文によっても立証される。すなわち、

奉納 妙法蓮華經 一部八卷

天治二年九月五日癸酉。助教清原信俊。勸進六口大法師願尊。良忍。忍昭。賢俊。聞寛。四七日間。於_二芹生別所_一、如法如說奉_二書

写畢。是依_レ為_三靈驗_一。所_レ奉_レ埋_三粉川宝前_一也。願以_二此善根_一。生_三兜率内院_一。結_三緣衆生_一。共值_三遇慈氏尊_一。法界衆生、平等利益、敬白。⁽¹⁰⁾

とある。これは清原信俊が願主となり、六人の勸進僧により、四七日間、大原の芹生別所で法華經の書写を行い、天

治二年（一一二五）九月五日に粉河寺の宝前に埋納した時の願文であるが、この六口の勸進大法師の中に「良忍」の名が見られることは注目すべきことである。『本朝新修往生伝』によると「大儒清原真人信俊」は、壮年のころから大原山寺で毎日衆僧を供養し、如法経を書写せしめて法華經一千五百部を写し、所々の名山靈寺に送り令法久住せしめた⁽¹¹⁾とある。前記の粉河寺納経もその一つであったが、京都の鞍馬寺から出た納経の経筒もこれに関連するもので次の銘文がある。

妙法蓮華經 一部八卷

保安元年九月十一日。主税助兼助教。清原真人信俊、誂請四口大法師 重拾 賢宴 賢俊 禅意 十箇日内。如法如說奉^三書写^三畢。過去二親共生^三仏前^二。常聞^三此經^二乃至法界衆生平等利益 敬白⁽¹²⁾

ここにも粉河寺の銘文と同様に信俊の名があるばかりか、勸進僧賢俊の名は両方に見られるので、良忍をふくめて当時の大原には幾人かの勸進僧がおり、法華經の如法写経につとめていたことが知られる。

この勸進僧は、法華と念仏との両面にわたって広く民衆との結縁を広め、同行者同志の關係を深めていったものと思われる。しかも如法経の書写が大原の芹生別所で行なわれ、その書写經典が鞍馬寺にも奉納されたとなると、大原と鞍馬寺との關係も良忍の在世時代まで溯ることが知られる。

『後拾遺往生伝』卷下は「如法経六部を書写して自他に廻向し、手足の指を切燃して九年、仏経に供養する。」として、良忍が法華勸進の行者であったことを伝えている。

四 第一次資料に見られる良忍

良忍に関する三種の往生伝を比較対照表にしてみると次のようになる。

<p>『後拾遺往生伝』</p> <p>卷下</p>	<p>『三外往生記』</p>	<p>『後拾遺往生伝』</p> <p>卷中 (補遺)</p>
<p>(一) 名前 沙門良仁</p> <p>(二) 叡山 叡山住侶</p> <p>(三) 堂衆 早入堂衆。久勤寺役。</p> <p>(四) 大原隠棲 及類暮年。隠居大原山。</p> <p>(五) 偏願往生 永断世営。偏願往生。</p> <p>(六) 法華 日別誦妙經一部。念仏六万遍。三時行法。多年不怠。</p> <p>(七) 如法經 書写如法經六部。廻向自他。</p>	<p>良忍上人 延曆寺東塔常行堂衆 往年之比。一千日門。詣無動寺。不着履之類。如忘名聞之思。傍輩同法。以為奇特。是祈菩提心也。</p> <p>其願成就。永絶交衆。構小庵止住大原。十二時修三昧行。年来不懈倦。兼披閱一切經論。造立堂舍佛像。多年練行。</p> <p>記載なし</p>	<p>上人良忍 台嶺首楞嚴院 禪徒</p> <p>中年以後。移住大原。偏願往生。常对仏前。消燈明光。観極楽。依正二報。密告舍弟堯賢上人。我年来修白毫觀。懺黑業罪。敢無散心。妄不出声。</p> <p>記載なし</p>

(八) 焚身供養

(九) 臨終瑞相

切然^二手足指。九年供養^二仏経。偏
断^二睡眠。常事経行。

己及^二命終。安住^二正念。音楽撃^レ
雲。見聞^二盈門。

記載なし

遷化後。往生^二極楽。瑞祥炳^レ焉。

暗夜觀^二仏相好。光明眼前。入棺之
時。其輕如^二鴻毛。

記載なし

先及臨終七日以前。病惱平癒。沐浴
香潔。繫^二五色糸於^二仏手。念^二仏匪^レ
懈。

己至^二終期。自結^二弥陀定印。三箇日
夜。全無^二動転。

其入滅之後三箇日。身暖如^二生時。顔
和似^二微笑。棺斂之時。輕如^二一紙。

衣襟之間。馥如^二百和。夢紫雲^二一筋。

東天響来。大鼓擊^レ雲。無^二音曲。

上人房前。有^二一池。々東岸有^二竜頭
舟。々中觀世音菩薩放^二金色光。安禪
微笑。

隣房有^二常陸律師。夢上人告日。我
倍^二本意。生^二上品上生。是融通念仏
力也。

上人年来善知識僧嚴賢。号^二小湯屋
聖。己告^二上人往生之由。凡如^レ此夢
想。告来人惣^二三十餘人之。

天承二年二月一日夜半也。

(十) 融通念仏

夢告

記載なし

大原律師覺嚴夢。上人來告云。我過
^二本意。在^二上品上生。是融通念仏之
力也。

(十一) 入寂年時

記載なし

天承二年二月

天承二年二月一日夜半也。

これらをしばらく“A伝” “B伝” “C伝”と呼ぶこととする。“A伝”は三善為康の『後拾遺往生伝』巻下にあ

る「沙門良仁」の伝であり、“B伝”は沙弥蓮禪の『三外往生記』にある「良忍上人」の伝であり、“C伝”は『後

拾遺往生伝』巻中に追補された「上人良忍」の伝である。

まず『後拾遺往生伝』巻下にある「A伝」から考察をすすめていこう。ここには「沙門良仁」とあるが、すでに如来蔵資料によって明らかになつたように、良仁は良忍であるから、良忍滅後数年を出でずして書かれた最初の良忍伝と言わねばならない。往生伝の多くには靈驗奇瑞が述べられているが、この良仁伝にはいまだ神秘化されていない素朴な人間像が示されている。これによると良忍は「日別に妙経一部を誦し、念仏六万遍」という法華と念仏との兼修者だったが、「暮年に及んで大原山に隠棲し、永く世営を断ち偏えに往生を願う」念仏者であると共に、他の一方では「如法経六部を書写して自他に廻向し、手足の指を切燃して九年、仏教に供養する」という法華勸進の行者であつたらしい。良忍が法華勸進の行者であつたことは、先にもふれたように紀州粉河寺裏の産土神社の経塚で発見された経筒の銘文によつても立証される。

つぎに『三外往生記』にある「B伝」を見てみよう。「B伝」の成立は「A伝」が成立してから十年も経過してないと思われるのに、「A伝」には全く見られない要素が付加されている。その第一は「往年のころ一千日間無動寺に詣で、匍匐の類も着けず、菩提心を祈る。名聞の思いを忘れたるが如し」というものである。これは無動寺明王堂における千日入堂という参籠修行であるが、「其の願成就して永く交衆を絶ち、小庵を構えて大原に止住す。」とつづくので、無動寺の千日入堂が大原隠棲の因由をなしたかのようである。次に、「十二時に三昧行を修し、年来懈倦せず」とあるのは、東塔常行堂の堂衆であつた良忍の修行ぶりを伝えたものである。「兼ねて一切の経論を披閲し、堂舎佛像を造立す。」とあるのも、叡山から大原に下つた良忍が来迎院を建て如来蔵にある蔵書を披閲した日々の生活の一端をしのばすものがある。「遷化の後、極楽に往生し、瑞祥炳焉なり。暗夜に仏の相好を覩るに光明眼前す。また入棺の時、その軽きこと鴻毛の如し。」と臨終の瑞相が語られているが、特に注意すべきは、「大原律師寛敵の夢に、

上人来り告げて云く。我れ本意に過ぎて上品上生に在るは、是れ融通念仏の力なり。天承二年二月。」とある部分である。これは著者蓮禪が当時の人々の風聞を書きとめたものと思われるが、「A伝」には見られなかった「融通念仏」の言葉がここに登場してくることに注意したい。

さらに「C伝」に目を向けてみよう。「A伝」では「永く世營を断ち、偏えに往生を願う。」とはいいながらも、別に妙経一部を誦し、如法経六部を書写し、焚身供養するといった法華の勸進者としての良忍像が強く打ち出されていたが、「C伝」になると、「中年以後大原に移住し、偏えに往生を願ひ、常に仏前に対して、灯明の光を消して極楽の依正二報を觀す。自余の行は人の知るところにあらず、舍弟堯賢上人（教光房）に密かに告ぐ。我れ年来白毫觀を修し、黒業の罪を懺し、敢えて散心なく、妄に声を出さず。しかる間屢に少病を受けて多日を送る。先ず臨終七日以前に及んで病悩平癒す。沐浴香潔して、五色の糸を仏手に繫け、念仏懺ることなし。已に終期に至り、自ら弥陀の定印を結んで、三箇日夜全く動転なく、寂して氣絶す。時に天承二年二月一日夜半なり。」という一文が加わってくる。これは「A伝」にも「B伝」にも全くなかった増補部分である。ここに示された「C伝」作者の良忍像は、つねに仏前の灯明を消して極楽の依正二報を觀じ、静かに声も出さず白毫觀を修する觀想念仏者であったことが知られる。さらに融通念仏の夢告の一段でも「C伝」では、「また隣房に常陸律師あり。夢に上人告げて曰く。我れ本意に倍して上品上生に生るるは、是れ融通念仏の力なり。上人年来善知識僧嚴賢、小湯屋聖と号す。すでに上人往生の由を告ぐ。凡そかくの如き夢想を告げ来る人、惣じて三十余人云々。」とあり、「B伝」「C伝」の両伝ともに「我れ本意に倍して上品上生に生るるは、是れ融通念仏の力なり。」という主文は変わらないが、「B伝」では夢告を告げられたのは覺嚴律師ただ一人であったのに、「C伝」では惣じて三十余人も告げられたとあり良忍伝成長のあとを明確に示

している。

このように三種の良忍伝はともに大原の地に隱遁生活を送った聖的上人像をえがきながら、^(A)“A伝”には法華勸進僧の面が強く示され、“B伝”では叡山常行堂の念仏僧として三昧行を修した一面が強調され、“C伝”では静かに白毫觀を修する觀想念仏者の風格が示されている。『三外往生記』の良忍伝において、初めて「融通念仏」という言葉が登場してくる。しかし、これを根本資料に照らして、良忍自身の言葉であるとの立証は不可能である。

五 結び

良忍の在世当時、叡山淨土教の中において、融通念仏の思想が見られることはよく知られている。^(B)しかし、良忍に融通念仏があったのだろうか。『決定往生緣起』には十界念仏というこれもまた特異な念仏思想が説かれている。この十界念仏というのは、天台の一念三千説にもとづいて、一切法は十界であり、この十界はみな仏身であるから、十界の弥陀名号を修して自他の往生を勧めたものである。したがって、この十界念仏は弥陀の名号を十たび唱えるといつた十念ではなく、文字通りの十界の弥陀名号を称えるものである。そして、この十界念仏は毎夜就寝のときに臨終の十念になぞらえて一心不乱に念仏して聖衆の來迎を期し、また結縁のために十界念仏をもうけて勸進するようにと述べている。この十界は十界互具とたがい十界を具するので、その念仏は百遍の念仏となり、その百界に十如を具するので千遍の念仏となり、さらに三世間を具するが故に三千遍の念仏となると次のように述べている。

抑此念佛數返雖三十念。十念中有三無量無數念佛。十界更互具故成三百返。百界各有十如、故成三千返。五陰世間。

國土世間。衆生世間。故成三千返。三百世間。各有無量數一故。成無數念佛。十念猶如成往生業。況無量數念佛耶。

この『決定往生緣起』の成立年代は決め手となる手がかりが今のところないが、本書には口伝法門的色彩が全くない堅実な学風をもっているので、その成立を十一世紀末まで溯らせてもよいかと考えられている。

この十界念仏は天台の一念三千の思想を根にもった念仏であり、良忍の融通念仏も一即一切の円具を説く天台の念仏の流れを汲むものであり、叡山淨土教思想の上からはいずれも特異の念仏思想である。この両念仏が相互間に交渉があつたかとか、影響があつたかというのではないが、叡山淨土教の流れからほとんど同時代にあらわれた両念仏であるところに深い関心を引くものがある。しかも、

儲十界念佛。爲結緣勸進

とあり、十界念仏には勸進の思想があらわれている。自と他との互具融通を説く融通念仏も同行同志の同胞関係を大切にする。勸進僧は広く民衆に結縁し、かかる結縁によつて広汎に同行關係を作りだし、それによつて仏への廻向、往生極樂を期する人々である。融通念仏は集団による称名念仏という形式をとり、その最大の特徴は念仏を通して、不特定多数の人々が結縁を行うことである。すなわち融通念仏はそのような自覚をうながすのに最も巧みな形態であり、当初からその中に念仏勸進の運動が存在している。この十一世紀末葉に一念三千思想にもとづく十界念仏の勸進がすすめられていたとすれば、そのころ良忍に融通念仏の勸進があつたと考えられなくもない。しかし、良忍には法華勸進の記録はあつても念仏勸進に関する直接的な資料を現在のところ見いだせないのが今ひとつ説得力に欠ける。

また、この融通という理念はむしろ数の論理とも大いに関係あるものと言える。融通念仏は多数作善功德信仰であ

るので数量信仰という面から検討してみたい。数量信仰とは、經典の読誦、書写または仏像仏塔の造立その他、仏名、神呪の誦持等の功德あるものと信ぜられたものを数多く修することによって、現世において諸種の利益を蒙り死後は安楽な世界に生れることを願うと共に、先亡の追修にも資せんとする信仰である。平安中期以降になって浄土教の盛行にともなつて、念仏の数量信仰がひろく行なわれたようであり、百万なる数を限つて修するものが百万遍念仏信仰である。これについては、『往生要集』第六別時念仏 第一尋常別行のところに、

迦才浄土論云。緯禪師。檢得經文。但能念佛。一心不亂。得百萬遍已去者。定得往生。又緯禪師。依小阿彌陀經七日念佛。檢得百萬遍也。⁽²⁰⁾

とあり、我が国における百万遍念仏による往生を示した最初のものと思われる。良忍も『後拾遺往生伝』巻下によると「念仏六万遍」とあり多くの念仏を唱えたようである。いま『読本朝往生伝』『後拾遺往生伝』によって、その当時の浄土教の特色をさぐってみると、

『読本朝往生伝』

沙門源信

念仏二十俱胝遍、奉読大乘經五万五千五百卷、法華經八千卷、阿彌陀經一万卷⁽²¹⁾

『後拾遺往生伝』

堀河天皇中宮侍女

毎日念仏滿六万遍⁽²²⁾

尼寂妙

所_レ唱弥陀仏号五百卅万返⁽²³⁾

阿闍梨教真

只以念仏六万遍⁽²⁴⁾ 為_二每日之勤_一

入道忠大丸(願西比丘)

我年来偏念仏 以_二小豆_一為_二遍数_一 限以_二二千斛_一。年序漸推移。已及_二七百斛_一⁽²⁵⁾

散位源伝

南無一心敬礼西方極樂教主三十六万億一十一万九千五百聞名阿弥陀仏⁽²⁶⁾

尼妙蓮

年来以_二小豆_一為_二遍数_一 唱_二弥陀宝号_一。既滿_二十石五斗_一⁽²⁷⁾

延暦寺僧隆暹

日別念仏十三万遍⁽²⁸⁾

とあり、念仏信仰の価値が数量であらわされている。そして、この時代、法華信仰とともに広く社会の各層に受け入れられていたものは、密教の神呪信仰であり、東台密の盛行にともなって神呪陀羅尼の効験を信じる信仰は上下貴賤を問わず広く流行した。源信も『統本朝往生伝』の伝によると、

奉念大呪百万遍。千手呪七十万遍。尊勝呪三十万遍、并阿弥陀不動光明仏眼等呪少々也。⁽²⁹⁾

とあって密教の神呪に関して深い数量信仰をもっていたことを伝えている。『中右記』の長治二年(一一〇五)三月三十日の条には、

今日公家誦祈被始行事等、

尊勝陀羅尼百萬遍、敦

兼朝臣。

仁和寺 五十萬遍、
在僧各
五十口

高野寺 五十萬遍⁽³⁰⁾

とあり、これはおそらく、仁和寺の僧五十人で尊勝陀羅尼を五十万念誦し、高野寺の僧五十人で同じく五十万を誦呪し、総計百人で百万の陀羅尼念誦の行を修することをいったものと思われるが、既に長治二年の院政時代には、多くの人々によって、所期の數量を満了しようとする考えがあったようである。⁽³¹⁾このように良忍の在世当時、數量信仰者の間において、われわれ衆生の行の融通の理念があったことを知り得る。

在叡時代の良忍が常行堂に奉仕する念仏僧であったことはほぼ間違いないが、この叡山の常行堂については、円仁(七九一〜八六四)が唐から帰ると早速東塔の虚空蔵尾に建てたのが最初であり、円仁は五台山から伝えた法照の五会念仏を門人に教え、常行三昧の行法としたと伝えられている。円仁の寂後その遺命によって貞観七年(八六五)から相応が不断念仏をはじめ、円珍の時になると東塔の常行堂は大講堂の裏に移された。その後増命は寛平五年(八九三)に西塔にも常行堂を建て、良源の時代になって康保四年(九六七)には横川にも常行堂がもうけられた。源為憲の『三宝絵詞』(九八四)には叡山の不断念仏会について、

念佛は慈覺大師のもろこしより傳て。貞觀七年より始行へるなり。四種三昧の中には。常行三昧となづく。仲秋の風すゝしき時中旬の月明なるほど。十一日の暁より十七日の夜にいたるまで。不斷に令行なり。身は常に佛を

廻る。身の罪こと／＼くうせぬらむ。口には常に經を唱ふ。口のとが皆きえぬらむ。心は常に佛を念す。⁽³²⁾

とある。京の町の人々は、そのころ叡山にのぼって不断念仏会にもうでたことが、『栄華物語』などという「山の念仏」として記録されている。そのころ浄土教の急激な勃興につれて、京の諸大寺には阿弥陀堂が造営され、「山の念仏」にならって不断念仏会が催せられることになった。

『栄華物語』卷十六によれば、法成寺西北院供養にさいして、

三日三夜、不断の御念佛、山の御念佛の様をうつし行はせ給。⁽³³⁾

という行事があつたが、さらに、

一番に十五人をぞ結ばせ給へる。⁽³⁴⁾

とあり、これは時間分けをし、融通の理念によって為されたことがわかる。

しかも、その法要を荘嚴華麗にするために叡山の常行堂に奉仕する天台声明に堪能な念仏僧が招かれることがしばしばあつた。これは『中右記』に見られる嘉承二年（一一〇七）十一月十六日の記事であるが、

拂曉參_二尊勝寺阿彌陀堂_一、依_レ可_レ始_二御念佛_一也、（中略）從_二去年十二月_一、以_二山堂僧十二人_一、三ヶ月間、被_レ行_二不堪念佛_一也。⁽³⁵⁾

とあり、これは良忍三十五歳のことであるが、山の堂僧が招かれて不断念仏が修せられたさまがうかがわれる。また保延元年（一一三五）七月十九日の条には、

今日堀川院御忌日也、仍未時許參_二尊勝寺_一、先參_二阿彌陀堂御念佛_一、從_二此曉_一□日被_レ行_二不斷念佛_一、山堂僧十二人召也。⁽³⁶⁾

とあり、これは良忍示寂後三年目の記事であるが、叡山常行堂の念仏僧であった良忍も、あるいは京都の諸大寺の不断念仏会の式衆として招かれたことがあったかもしれない。そうすれば、良忍に融通念仏の理念があったと考えられる。

良忍の研究において、最も資料価値の高い根本資料として大原の如来藏には、良忍の書写本十二点、手扱本三点が現存するが、その中に融通念仏の言葉を見い出せなく、資料があまりに少ないので、これによって良忍の浄土教思想を窺うことはできない。良忍滅後十数年経った頃に書かれた『三外往生記』の良忍伝に初めて融通念仏の言葉が現われる。しかし、これを根本資料に照らし合わせて良忍自身の言葉であるとすることはできない。むしろ良忍の周辺にこのような思想が胚胎しており、この夢告を事実と容認する念仏衆団が彼の滅後十数年頃に存在していたことに注意を向けなければならない。

叡山浄土教の中には融通念仏思想が見られる。又、この融通という理念は、それよりも教の論理とも大いに関係あるものと言える。良忍の在世当時、数量信仰者の間において、われわれ衆生の行の融通の理念があったことを知り得る。そして、このことは不断念仏会においても見られた。叡山常行堂の念仏僧であった良忍も、京都の諸大寺の不断念仏会の式衆として招かれたことがあったかもしれない。そうすれば、良忍に融通念仏の理念があったと考えられる。

融通念仏信仰の運動の起源は『三外往生記』の書かれた鳥羽院政期の久安年間（一一四五～一一五〇）ごろまで溯ることができ、今日のところ文献上から明確にこれを押えることは出来ない。しかし、良忍が在世中に融通念仏を唱えたに相異なる。

- (1) 塚本善隆稿「融通念仏宗開創質疑」(『日本仏教学会年報』二十一号)
- (2) 小寺文顯稿「良忍上人作『略布薩次第』の研究」(融通念仏宗教学研究所編『良忍上人の研究』、白土わか稿「良忍上人と曼殊院本『出家作法』」(同))
- (3) 『後拾遺往生伝』の成立については、井上光貞稿「往生伝・法華験記解説」(『日本思想大系』七、七四四頁) 参照
- (4) 井上光貞著『日本浄土教成立史の研究』二〇六頁
- (5) 承久二年(一二二〇)に沙門慶政は『後拾遺往生伝』、『三外往生記』の両伝を写しているが、その中には良忍伝がないから、承久二年以後に加えられたものであらうとする説がある。塚本善隆氏前掲論文
- (6) 仏教全書一〇一 二七二a
- (7) 『美の修復』 一七三頁
- (8) 同
- (9) このようなことについては、岩橋小弥太稿「聖応大師伝資料の一二に就いて」(『紀元二千六百年記念史学論文集』) 横田兼章稿「大原如来蔵における良忍上人関係資料」(融通念仏宗教学研究所編『良忍上人の研究』) 文化庁文化財保護部美術工芸課編『来迎院如来蔵聖教文書類目録』などに詳しい。
- (10) 奈良国立博物館刊『経塚遺宝展銘文集』三号
- (11) 『日本思想大系』七 六九〇頁
- (12) 奈良国立博物館刊『経塚遺宝展銘文集』四十五号
- (13) 『日本思想大系』七 六六四頁
- (14) 同 六七七、六七八頁
- (15) 同 六六〇頁
- (16) 佐藤哲英著『叡山浄土教の研究』
- (17) 恵心全集一 五八四頁
- (18) 佐藤哲英著『叡山浄土教の研究』 二九一頁

- (19) 恵心全集一 五七七頁
- (20) 同 一六五頁
- (21) 『日本思想大系』七 五七三頁
- (22) 同 六四六頁
- (23) 同 六五〇頁
- (24) 同 六五五頁
- (25) 同 六五九頁
- (26) 同 六六四頁
- (27) 同 六六六頁
- (28) 同 六六八頁
- (29) 同 五七三頁
- (30) 『史料大成』十一 三十二頁
- (31) 伊藤真徹著『平安浄土教信仰史の研究』
- (32) 仏教全書九〇 二七〇
- (33) 『日本古典文学大系』七十六 五〇頁
- (34) 同 五十一頁
- (35) 『史料大成』十一 二九九頁
- (36) 同 十五 一五七頁